

小学校における英語活動の可能性

コミュニケーション能力の基礎を培う英語活動の在り方

小学校における英語活動研究会議

研修員 入澤 潤（川崎市立南百合丘小学校） 加藤 香代（川崎市立今井小学校）

佐伯 幹子（川崎市立宮内中学校） 松田 典英（川崎市立稲田中学校）

指導主事 佐藤 剛

主題設定の理由

平成 14 年度より小学校で国際理解に関する学習の一環として外国語（主に英語）会話を取り入れた活動ができることになり、3 年が経過した。全国の小学校におけるその実施率は、文部科学省が平成 16 年 3 月に行った実施調査によると 88.3% という高さであった。

本市においても、英語活動としての実践を積み重ねている学校は年々増加の傾向にあり、ALT や EAF(English Activity Fellow、英語活動補助員)を活用しての英語活動を計画、実践している学校は 100 校を超えている。しかし、母数が増えるほど 1 校当たりの ALT や EAF の訪問機会は少なくなり、各学校において外国人との T・T の学習計画を立てる難しさは増している。

また、内容についても、英語活動の実施と義務教育がめざす「生きる力」の育成との関連性をどのように解釈すればよいのかなどの疑問を抱えたまま、各学校ごとの方針に基づき決められている。特に昨今は、外国人を招き、異文化理解をねらいとしてきた従来の国際理解教育を主としたものから、英語の運用能力を育てようとする英会話活動にシフトしてきている。アジア諸国や EU における実状を鑑みると、小学校における英語が教科として位置付けられる可能性は極めて高い状況にある。

このような実状を踏まえ、本研究会議では、小学生にとって「生きる力」につながる価値ある英語活動はいかなるものかを、小・中学校の連携を視野に入れつつ検討することにした。とりわけ、外国語の目標となっているコミュニケーション能力の基礎を培うことに焦点を絞ることにした。

研究内容

1 研究の仮説

アルファベットの音声と文字を扱うことは、コミュニケーション能力の基礎を培うことになる。また、場面に応じた簡便な英語を運用していくことにより、人間関係を取り結ぶコミュニケーションの基礎が培える。

2 研究の方法と内容

(1) 国語と外国語に共通するコミュニケーションの基礎を指導要領から読み取る

中学校においては、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」ことが「中学校学習指導要領 解説 外国語編」において目標として設定されている。

一方、小学校の「小学校学習指導要領解説 国語編」においても、「伝え合う力」を掲げ、特に入門期においては、「話すこと・聞くこと」の重要性がうたわれており、ともにコミュニケーションという

ことに注目している証左といえる。

実践的なコミュニケーション能力の基礎を養うことは、実は小学校入学時から始まっており、小・中学校の教員は9年間のスパンで、互いの指導要領を基本理念にしなが、縦横自在に、総合的に連携しあう姿勢が必要であると考えた。

(2) 小学生の学習の特性を先行研究、授業観察等から明らかにする

中学校の教員は小学校での指導経験がなく、児童理解が難しい。そこで、文献や小学校教員の経験に基づき、小学校の児童の学習への取組の特徴を整理することにした。小学校では低学年、中学年、高学年という発達段階の節があるが、年齢が低いほど音声を真似る耳の良さがある。聞いたことを、先入観なく、素直に自分の音声として発音することができる。このことから、音声重視の指導が適切であると考えた。また、モデルになる音声教材については、英語を母国語とする者とした。

一方、論理的な思考、とりわけ演繹的な思考はまだ難しいので、文法指導は向かない。繰り返しの経験から帰納的な考えにより、法則を類推し、実感していく体験中心の活動が望ましい。

(3) 中学生の外国語学習の実態から小学校で必要と思われる指導内容を検討する

中学校においては、英語は数学と並び苦手になっている生徒が多い教科である。特に英語が読めない生徒が多いが、これは日本語が表音文字なのに対し、アルファベットは文字の名前を知っていても、単語を読む上では何の手がかりにもならないことに由来している。そこで、小学校でのアルファベットの音声指導により基礎を培える可能性がある。

3 検証授業

中学校英語科教員と小学校教員のT・Tで、主に中学校教員が中心となって指導し、小学校教員は児童とともに学びながら、児童を見取り指導していく形態をとった。仮説に基づき、コミュニケーションの基礎として、アルファベットの音声をフォニックスとして導入し、あいさつ等の普遍的なやりとりをもれなく大切に扱うことに心掛けた。

第5学年英語活動案

- 1 題材名 「英語を感じよう」
- 2 目標
 - ・自分から進んで、英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする。
 - ・歌やゲームを通して英語表現・リズムに親しむ。
 - ・アルファベットの音について知る。

3 展開

過程	児童の学習内容	支援と留意点
ウォームアップ	あいさつ・自己紹介を聞く。 「ABC」を歌う。	名前と似顔絵の板書 T: Hello, everyone. My name is Norihide Matsuda. I m an English teacher from Inada Junior high school. Ms. Kato is my friend. So I came to this school to enjoy English today. ギター伴奏で「ABC」を歌う。

<p>フォニックス</p>	<p>これから使う単語の確認 T: What s this? S: It s an apple. A: apple B: banana C: cat D: dog E: elephant F: fish G: Godzilla</p> <p>アルファベットの読み方のチャンツ A says a. A, A apple.</p> <p>つなげて遊ぼう Bad, bag, bed</p>	<p>Apple Godzilla の絵が描いてある巻物を順に開きながら見せ、リズムよく発音練習をする。</p> <p>Aなのに「エイ」と読まないことに着目させる。</p> <p>「エイブル」ではなく apple 「ジージーラ」ではなく Godzilla</p> <p>リズムに合わせて、手拍子や行進など、変化を付けて活動する。</p> <p>同じ音で始まる単語をつなげて、繰り返し読んでいく。</p>
<p>活動</p>	<p>形で遊ぼう 活動1 歌 “ I see a Star Song ” 1 練習 一緒に歌う 2 黒板に貼ってあるものを指す 黒板に貼ってあるカードを指さしながら歌う</p> <p>活動2 Shape fishing 発音した形の紙をできるだけ多く自分の班にストローで吸い付けて持ってくる。</p> <p>活動3 国旗当てクイズ わかった班が手を挙げて答えを言う。</p>	<p>6班に分けてグループ対抗の形で行う。 単語の確認 star, circle, heart, square, triangle, rectangle</p> <p>大きさ、厚さなどを変えて、点数を変える。 一つもってきたら次の人と交代する。</p> <p>I see a red star. のように形・色などがわかるようにヒントを与える。</p>
<p>挨拶</p>	<p>自分たちの活動を振り返り、互いに拍手をする。</p>	<p>活動ぶりをほめ、みんなで拍手をして終わる。</p>

授業の考察

アルファベットを順に唱えることが歌によってできるようになった。一方、アルファベットは文字の名前であり、そのままでは、単語が読めないことを知り、フォニックスの活動の意味が理解できているようであった。

ただし、今回は、フォニックスの学習としては、一度に与える単語の数が多すぎた。音として扱う場合は3つぐらいが適当であろうという感触を得た。

あいさつや返事等はその都度、指導者が意識をしながら、ゆとりをもって接し、きちんと交わすことができていた。

研究のまとめ

1 研究を通して見えてきたこと

本研究を通して、次のようなことが見えてきた。

ゲームや歌を中心とする様々な英語活動が先行する中、コミュニケーションの基礎となるものは何か、授業の要素としてなくてはならないものは何かについて、考察することができた。

基礎というものをそれがなくては先に進むことができない要素とすると、アルファベットの名前ではなく、音声と文字そのものの習得こそが、基礎を培うことになるといえることが確認できた。

英語活動を、世界共通の普遍的な人間同士のコミュニケーションに必要な力をつける機会ととらえることができた。場面に応じた立ち振る舞いや言葉の使い方を、簡便な英語の運用によって体感させることにより、コミュニケーション能力を身に付けていける。授業のねらいを「実践的なコミュニケーションの基礎を培う」ことに集約することにより、今後義務教育9年間を通してのカリキュラムの開発の可能性を見出すことができた。

各活動案についても、学校や児童の実態に合わせて修正しながら活用していけるようなイントラによるシステム構築の目途が立ってきた。

2 今後の課題

コミュニケーション能力と安易に使っている言葉の意味について、さらに定義を明らかにしていきたい。小学校の国語と中学校の外国語（英語）の共通するねらいを確認し、小・中連携の視点から、今後さらに共通理解を図っていくことが大切であると思う。特に、小学校4年生の国語でローマ字を習得することになっており、それを生かす指導を開発していくことが重要である。

また、ネイティブ・スピーカーの代わりになる良質な音声教材の発掘が課題である。現在、様々な会社から多種多様の教材が出ている中、その一つ一つを吟味して提案することは困難であった。この点については次年度以降、様々な学校で評価を得ている教材や自己開発したものを紹介することが期待される。

最後に、本研究を進めるに当たり、適切なお指導、ご助言をいただきました先生方、研究をご支援いただきました研修員所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心からお礼を申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|-------------------------------------------------------|-------|
| 松川 禮子『小学校に英語がやってきた！』アプリコット | 1997年 |
| 影浦 攻『オピニオン叢書 64 小学校英語 66 研究開発学校の取り組み全情報』明治図書 | 2000年 |
| 後藤典彦・富田祐一編著『はじめてみよう！小学校・英語活動』APRICOT | 2001年 |
| 『小学校英語活動実践の手引き』文部科学省 | 2001年 |
| 『英語活動公開授業研究会資料』川崎市小学校国際教育研究会 | 2003年 |
| 「改訂版総合的な学習の時間のための教師用指導書 Let's Enjoy English」綾瀬市立寺尾小学校 | 2003年 |

【指導助言者】

川崎市教育委員会学校教育部指導主事

小池 優一